Roots Vol.1 ストリッパー物語

7月10日［水］～28日［日］ シアターイースト

詳細はP9・10へ

宣伝美術：永瀬祐一
撮影：西村 淳

つかこうへいの名作を三浦大輔の冷徹な視線で再構築

現在の小劇場演劇のルーツは、'60～'70年代に「アングラ演劇」といわれた小劇場運動だ。その時代の代表作に、いま注目されている若手クリエイターが挑む、新シリーズの第1弾。過酷な被虐を笑いに転化させ、俳優を極限まで追いつめる演出で一時代を築いたつかこうへいの名作に、ポツドール主宰の三浦大輔が挑む。ネガティブな感情を剥き出しにし、リアルな性描写を白日の下に曝して憚らない三浦が、身も心もボロボロになりながら稼ぎ続けるストリッパーと、いたぶられながら生きるヒモの歪んだ愛のストーリーを、新解釈で甦らせる。

作：つかこうへい　構成・演出：三浦大輔
出演：リリー・フランキー、渡辺真起子／
渋川清彦、安藤 聖、古澤裕介、新田めぐみ、
米村亮太朗、門脇 麦／でんでん

ヒトコト
三浦大輔
有名な作品ですが、変な先入観を持たずに純粋に脚本を読んだ感覚で演出したいと思います。70年代の作品を、今自分の世代の人間が演出した時、どのような作品に仕上がるかという所を楽しみに観に来ていただきたいです。出演者も一筋縄ではいかない魅力的な方々が揃い、自分自身もとても楽しみです。

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
東京都／東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
＊東京文化発信プロジェクト事業

二兎社公演㊳ 兄帰る

8月3日［土］～9月1日［日］ シアターウエスト

詳細はP11・12へ

©須藤秀忠

想定外の出来事で「安心」「信頼」が音を立てて崩れてゆく

妻子を棄てて女に走った父の20年ぶりの帰還を、母の苦労を知る息子の目で描いたのは菊池寛の『父帰る』だった。永井愛が描くのは、多額の借金を抱えて姿をくらましていた、一家の兄の出現の話。うさん臭くも冷静に状況を把握する兄(鶴見辰吾)と、第三者的にこの一族の対応を見つめる弟の妻(草刈民代)を前に、我欲やらおとなの事情やらで、どんどんブレてゆく家族と親戚たち。想定外の出来事により「安心」や「信頼」がなし崩しになってゆくどこぞの国の縮図にも見えて、切実なことこのうえない。永井の岸田戯曲賞受賞作、14年ぶりの再演。

作・演出：永井 愛
出演：鶴見辰吾／草刈民代／堀部圭亮／
伊東由美子／小豆畑雅一／枝元 萌／
藤 夏子／二瓶鮫一

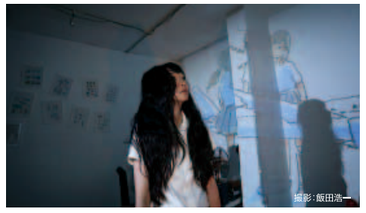
ヒトコト
永井 愛
『兄帰る』の再演は私にとって宿願のようなもの。今か今かとベストタイミングを狙っていました。小さな嘘の肥大化を描いたこの家庭劇は、震災と原発事故のショックが生ぬるく変容していく今、最もふさわしい出番を迎えた気がします。新しいキャストを迎え、私も新作に向かうつもりで「中村家のちょっと怖い夏」に挑みます。

主催：二兎社　共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

eyes plus マームとジプシー8月公演 cocoon

8月5日［月］～15日［木］ シアターイースト

詳細はP11へ



撮影：飯田浩一

今日マチ子が描くあの時代の少女たちを、マームが身体化すると……

日常会話の断片が、視点をずらしたり、時間を隔てたりしながら、何度も繰り返されてゆくうちに詩となり、ドラマになってゆくマームとジプシーの世界。作・演出の藤田貴大は留まるところを知らないハイ・ペースで作品を発表しているが、初の海外公演を成功させた直後の新作は、昨年「マームと誰かさん」というシリーズでコラボした漫画家・今日マチ子の代表作『cocoon』の舞台化だ。沖縄戦に動員された少女たちが体験した、想像を絶するそれぞれの過酷な日常から着想を得た物語が、ピュアで切ないマームの言葉と身体を通して立ちのぼる。

作・演出：藤田貴大
出演：青柳いづみ／伊東茄那／大岩さや／尾崎 紅／尾崎桃子／
川崎ゆり子／橘髙佑奈／菊池明明（ナイロン100℃）／
小泉まき（俳協／中野成樹＋フランケンズ）／小宮一葉／
中前夏来／鍋島久美子／難波 有／長谷川洋子／的場裕美／
山崎ルキノ（チェルフィッチュ）／吉田彩乃／吉田聡子／
李そじん／石井亮介／尾野島慎太朗

ヒトコト
マームとジプシー制作
今夏、マームとジプシーは今日マチ子が戦時中の少女たちを描いた代表作「cocoon」の舞台化に挑みます。音楽はクラムボンの原田郁子が参加。マームとジプシー、今日マチ子、原田郁子の三者が「時代」と対峙した時、何が生まれるのか。この夏、注目作になること間違いなしの本作をどうぞお見届けくださいませ。

主催：マームとジプシー　共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

オーバード・ホール名作ミュージカル上演シリーズ第４弾 ハロー・ドーリー！

8月23日［金］～25日［日］ プレイハウス

詳細はP12へ

初演から約50年。ついにあの名作ミュージカルの翻訳上演が実現

♪ハロー・ドーリー・ウェル・ハロー～というルイ・アームストロングやバーブラ・ストライサンドの歌声は、誰もが耳にしているはず。が、ブロードウェイで'64年に初演されたミュージカルのスタンダードであるにもかかわらず、日本での翻訳上演が実現したのはなんと昨年、富山のオーバードホールが初めてだった。長年ドーリー役を演じることを夢見ていた富山市出身の剣幸にとって「あり得ないことが起こった」この公演は、驚愕に値するハイ・レベルと絶賛され、ついにこのほど東京公演が実現。音楽人口の層の厚さで知られる富山のポテンシャルに注目!

脚本：マイケル・スチュアート
振付・演出：ロジャー・カステヤーノ
作詞・作曲：ジェリー・ハーマン　訳詞・演出：寺﨑秀臣
出演：剣　幸／モト冬樹／本間憲一／井料瑠美／野田久美子／
藤岡義樹／佐藤弘樹／大内慶子／
坂井宏彰／柳川玄奈　ほか

ヒトコト
奈木 隆（富山オーバード・ホール芸術監督）
NYブロードウェイが1964年の初演から大事にしている名作ミュージカル『ハロ・ドーリー！』。昨年、富山市オーバード・ホールで日本人による初の翻訳上演を実現しました。各方面から賞賛の声をいただき、この夏いよいよ東京芸術劇場に登場します！ジェリー・ハーマンの名曲にのせ、個性派キャストで贈るこの恋物語は必見です！

主催：（公財）富山市民文化事業団／富山市　共催：北日本新聞社／東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

芸劇dance 勅使川原三郎新作公演 第二の秋 Second Fall

9月6日［金］～8日［日］ プレイハウス

詳細はP13へ

撮影：吉田泰子

４年ぶりのソロは、謎めくブルーノ・シュルツの世界に魅せられて

目にする風景が時にグロテスクに、時に不安を煽るように不可思議に歪んでゆく……。シュールな魅力に満ちた、ポーランドを代表する作家・画家、ブルーノ・シュルツ(1892-1942)は、クエイ兄弟など、映像や舞台のクリエイターの創作意欲を刺激する存在でもあるようだ。勅使川原三郎も『ドドと気違いたち』『春、一夜にして』など、シュルツの小品にインスパイアされた作品を連続して発表しており、今回の新作も、シュルツの『第二の秋』を始めとした短編のいくつかを編んで構成する。作家の言葉に共振するダンサーの身体から、見えてくるものは。

演出・振付・美術・照明：勅使川原三郎
出演：勅使川原三郎
佐東利穂子／ジイフ

ヒトコト
勅使川原三郎
装置と照明もデザインするが、物質空間と光の重層性をテーマに造られるだろう。人体との葛藤も作品全体の重要な要素になる。今年に入ってすでに２作のシュルツ原作のダンス公演を行ったが、この新作はより強固に、より核心的に創作したい。

主催：有限会社カラス　共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

芸劇eyes キリンバズウカ マチワビ

9月19日［木］～25日［水］ シアターイースト

詳細はP14へ

「マッチ・アップ・ポンプ」 撮影：内堀義之

公演ごとに人気加速中の話題の劇団、芸劇に初登場

有望な若い演劇人を紹介してきた「芸劇eyes」。ここで初めて知る未知の才能との出会いも、この劇場に通う楽しみのひとつになってきた。今回初登場のキリンバズウカは、'80年生まれでシナリオライターでもある登米裕一（脚本・演出）が率いる劇団。重たい話をサラッと笑える群像劇に仕立てて共感を得てきた。今回作品は、都会になりきれない街で働く人や家族を、オリジナル楽曲と『ままごと』や商業演劇でも活躍する青木拓也の美術で、丁寧に人間くささたっぷりに描いてゆく。

脚本・演出：登米裕一
出演：日栄洋祐、こいけけいこ／加藤理恵、上鶴徹、黒岩三佳、
後藤剛範（国分寺大人倶楽部）、永島敬三（柿食う客）、
松永渚、森下亮（クロムモリブデン）／
内田悠一（レボリューションズ）、折原アキラ（青年団）、
金聖香（SET）、坂田麻衣、助川紗和子、渡邊亮

ヒトコト
登米裕一
生きる事は無様で滑稽で、それでも素晴らしい。どうしようもない人たちがたくさん出てくる舞台ではあるのだけれど彼らは日々懸命に生きているだけなのだ。そんな人々の物語を責任を持ってお届けしたいと考えている。願わくば無責任にただ見届けていただけたらと願う。劇場でお待ちしています。

主催：キリンバズウカ　共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）